

は、32年引締め時に発行額が抑制された結果、当月の満期償還分が著減をみたことによるものである。このような発行ベースでの起債額の減少という事情もあって商中、相互、信金などの消化が比較的順調に進み、都銀筋に対するしわ寄せは前月に比し若干減少した。一方6月中の金融債は、ボーナス期入りから各行の割引債の売込みが積極化したほか、資金運用部の興長銀債引受け(機械メーカーの延払い販売資金に充当)が行なわれたこともあって、純増ベースで324億円、前月比27億円増となった。

なお、加入者引受け電々債の市況は、金融情勢のひっ迫にもかかわらず、官庁共済組合など機関投資家を中心とする需要が引き続き堅調であったのに加え、既発債の玉不足もあって一部銘柄が若干値を上げ、総じて強合みに推移した(49年9月償還利付債利回り5月末9.45%、6月末9.53%)。

## 実体経済の動向

### ◇生産、根強い増加基調続く

5月の鉱工業生産(季節調整済み)は、前月微増(+0.9%)のあと、前月比+2.1%とかなりの増加を示した。耐久消費財が引き続き減産となったものの、資本財が前月に続いて増加を示したほか、建設資材が4か月ぶりに増加に転じ、生産財も前月減少のあと再び増加したためである。このように、当月の生産の基調には依然根強いものがうかがわれる。これは、昨年秋以降、徐々に盛り返り上がりを見てきた設備投資が、ゆるやかながら増勢を続け、これを反映して資本財、なかでも受注生産機種の生産が引き続き高水準を続けているためとみられる。さらにこうした情勢を映じて、生産財部門の生産もまた、増勢鈍化基調のうちにもなお底堅い動きとなっている。

このほか、メーカー、商社などの輸出努力が、海外景気の好調にささえられて、かなり奏効しており、これが、生産の高水準持続に大きな役割を

果たしている点も、見のがすことはできない。

5月の生産を用途別分類でみると、まず資本財がかなりの増加となった。前月大幅増加をみた一般用ボイラーが反落したものの、一般用蒸気タービンやタービン発電機の著増を中心に受注生産機種に根強い生産増がみられたためである。一方、見込み生産機種(標準誘導電動機など)は引き続き生産頭打ち傾向を続けており、また当月は最近まで増産を続けてきた精密機械および自動車も、季節性を考慮してもなおかなりの減産となった。次に建設資材は徐々に増加に転じた。これは主として、オリンピック工事などの追込みおよび好天候による出荷増に加え、4月の春闘スト減産の反動もあって、セメントが大幅に増加したためである。そのほか亜鉛鉄板などの鉄鋼関係建設材も伸長をみている。このような投資財生産の堅調に反して、消費財はごく一部の品目(ピアノ、オルガンなど)を除きいずれも減産傾向を続けた。なかでも耐久消費財は、従来から在庫圧迫の強い電気機械が引き続き低調であるのに加えて、さらに5月には、精密機械(カメラ、8ミリ撮影機、時計)、および輸送機械(360cc以下の乗用車など)がかなり大幅な減産となった。生産財は3か月ぶりに増加した。化学、非鉄が根強い需要増大に4月の春闘スト反動増も加わって、上昇をみたほか、繊維も合繊を中心に、根強い生産基調を維持している。

### 特殊分類別生産動向

(季節調整済み、前期(月)比増減率%)

	38年 4~ 6月	7~ 9月	10~ 12月	39年 1~ 3月	39年 3月	4月	5月
投資財	4.6	9.1	4.5	3.9	-3.0	3.2	4.3
資本財	4.7	7.1	6.0	4.7	-4.2	4.4	4.8
同(輸送機械を除く)	1.8	9.2	3.2	2.1	-4.7	3.3	3.3
建設資材	3.7	14.2	0.3	3.1	-1.5	-0.9	5.6
消費財	3.5	2.7	6.4	0.9	-0.9	0.1	-0.5
耐久消費財	7.5	0	8.0	3.8	-0.9	-1.6	-2.6
非耐久消費財	1.5	3.6	5.5	0.7	-0.6	0	0.6
生産財	5.5	6.1	5.3	4.9	-0.5	-1.0	1.1

(注) 通産省調べ(35年=100)。

なお6月の生産(速報、季節調整済み)は前月比+1.2%となった。ここ1~2か月間工期の集中により急増した大型機械が大幅減となったため資本財が前月比-0.5%となったほかは、建設資材、消費財および生産財はいずれも増加したためである。

次に5月の鉱工業出荷(季節調整済み)は、前月比+1.3%とかなりの増加をみた。資本財のうち受注生産機種(主として一般用蒸気タービン、タービン発電機など)の出荷が引き続き堅調であること、建設資材(主としてセメント、亜鉛鉄板など)が生産の場合と同様の理由から大幅に伸長したこと、耐久消費財(主として電気冷蔵庫などの民生用電気機械)が前月の反動もあってかなりの増加をみたこと、さらに生産財も根強い需要にささえられて化学、鉄鋼を中心に増加したこと、などのためである。一方、資本財のうち自動車、耐久消費財のうち精密機械などでは、季節性を考慮してもなお、かなりの出荷減がみられた。

なお、6月の出荷(速報、季節調整済み)は前月比+0.9%と、前月に引き続き増加した。

この間5月のメーカー製品在庫(季節調整済み)は前月比+1.5%と増加傾向を持続した(在庫率としては横ばい)。輸送機械(自動車)、精密機械、非鉄、化学および繊維(合繊)の増加が中心であ

る。輸送機械(自動車)および精密機械は、かなり大幅な減産が行なわれたにもかかわらず出荷減がこれを上回ったためであり、非鉄、化学は4月スト減産に伴う在庫くいつぶしの補充によるものである。また合繊は、新規設備の稼働に伴い生産増が著しい反面、出荷の増勢が、末端実需の売行き不振やナイロン糸値下げをきっかけとした安値期待感の台頭などを背景に、鈍化したためである。一方、鉄鋼は、出荷の好調により、銑鉄、圧延鋼材、亜鉛鉄板などを中心に徐々に減少した。

なお、6月の製品在庫(速報、季節調整済み)は前月比-0.1%と久方ぶりに微落した。

次に、5月のメーカー原材料在庫(季節調整済み)は前月比-0.1%と微減、在庫率もわずかながら低下した。燃料動力がかなり増加した反面、国産製品原材料および輸入素原材料が減少したことによる。最近の動きをならしてみると、輸入素原材料在庫がいくぶん圧縮されているほか、国産原材料在庫でも増加幅の縮小傾向がみられるが、後者はおおむね生産増勢の鈍化に見合ったものとみられる。

この間4月の販売業者在庫(季節調整済み)は、前月比-1.8%と反落した。スト減産に伴い電気銅および亜鉛が大幅な減少をみたほか、凍結在庫放出により普通鋼々材が減少したことが主因であ

生産・需給動向(鉱工業)

(季節調整済み、増減率は%)

	38年			39年				
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	3月	4月	5月	
生産	指数	137.7	146.5	154.1	159.5	159.8	161.3	164.7
	前期(月)比	4.8	6.4	5.2	3.5	-1.7	0.9	2.1
	前年同期(月)比	6.0	13.5	19.8	21.3	21.1	17.5	20.0
出荷	指数	136.9	144.1	151.0	157.1	158.4	159.0	161.5
	前期(月)比	3.9	5.2	4.8	4.0	-0.3	0.4	1.6
	前年同期(月)比	6.8	13.6	16.2	19.1	17.2	16.8	17.7
製品在庫	指数	165.9	171.8	180.0	186.1	186.1	188.1	191.0
	前期(月)比	0.5	3.6	4.8	3.4	0.5	1.1	1.5
	前年同期(月)比	2.7	2.7	5.5	12.8	12.8	14.2	14.4
在庫率	120.6	118.8	118.0	117.5	117.5	118.3	118.3	

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。前年同期(月)比は原指数による。

需要関係の指標

	38年			39年		
	6月	9月	12月	3月	4月	5月
原材料在庫(在庫率)	103.2 (83.0)	112.3 (84.9)	114.6 (82.0)	114.6 (81.0)	115.0 (81.7)	115.8 (80.0)
うち輸入分(在庫率)	107.6 (84.3)	118.8 (85.3)	117.2 (77.1)	116.0 (78.1)	117.7 (78.7)	117.3 (76.5)
製品原材料在庫(在庫率)	116.0 (86.8)	122.7 (88.1)	128.9 (86.1)	133.1 (86.2)	135.8 (87.6)	134.7 (85.9)
販売業者在庫	160.9	153.9	164.3	170.2	167.1	
	38年 7~9 月平均	10~12 月平均	39年 1~3 月平均	39年		
				3月	4月	5月
機械受注(海運を除く民需)(同季節調整済み)	546 (600)	630 (699)	701 (642)	889 (618)	685 (709)	681 (784)
機械販売(船舶を除く)(同季節調整済み)	978 (922)	883 (918)	1,020 (1,002)	1,326 (996)	959 (1,021)	917 (983)
資本財出荷(輸送機械を除く)	152.6	159.1	165.8	166.6	171.3	175.5

(注) 在庫出荷は通産省調べ、季節調整済み指数(35年=100)。機械受注、販売は企画庁調べ127社分、同季節調整は本行統計局センサス法による。

る。一方、販売業者の輸入素原材料は前月大幅減の反動もあって、綿花、羊毛を中心に若干の増加をみている。

次に設備投資関係指標についてみると、5月の資本財出荷(輸送機械を除く)、機械販売額(船舶を除く)などの動向からみて、工事ベースでの設備投資は依然高水準を維持しているものと判断される。ちなみに5月の機械販売額(船舶を除く、季節調整済み)は、4月に大型機械が集中した反動もあって減少をみたが、4～5月をならしてみると1～3月とほぼ同様の高水準となっている。一方、先行きを示す機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)の動向をみると、前月比+10.7%と、大幅増加をみた前年に引き続き増加し、かなり根強い動きとなっている。化学工業からの受注が引き続き高水準を維持しているほか、鉄鋼業からの受注もここ2ヵ月、増加を示している。

#### ◇商品市況、地合い軟弱のうちにも一部に反発の動き

6月から7月前半にかけての商品市況をみると、繊維相場が人絹糸を除いて総じて軟化し、鉄鋼薄板も続落をみたほか、紙類の一部に新たに需給が小ゆるむものも現わるなど、軟弱な地合いにかわりはないが、そうしたなかで、条鋼類、石油、人絹糸、砂糖など、輸出の好調ないし市況対策の奏効からここにきてはっきりと市況が持ち直し、ないしは反騰に転ずるものもかなりみられた。この間、化学、紙関係の多くの商品は堅調を維持し、また非鉄は海外市況の堅調を映じてむしろ上伸歩調をやや強めた。

商品別の動きをみると、まず繊維は人絹糸を除き軒並み軟化した。天候不順による夏物衣料品の売行き伸び悩み、ならびにそれを背景とする機屋筋の糸手当ての低調が主因であるが、そのほか、さきのナイロン建値下げを契機として合繊全般に対する先安感が生じ、これが繊維市況全体の地合いを頭重くしている面も否めない。鉄鋼のうちの薄板も一段と低落をみた。需要は輸出伸長のささえもあり、とくに不調というわけではないが、

メーカーの増産態度が一貫して根強いためである。また紙のうち包装紙、板紙部門などでも需要期明けもあって需給が小ゆるむものがみられ、さらに化学でも従来から軟化を示してきたか性ソーダが軟弱の度合いを強めたほか、塩類、塩酸関係にもいくぶん落ち着きがみられた。

反面、鉄鋼のうちでも条鋼類、無規格厚板は輸出の好調、くず鉄の値上がり、凍結在庫の放出完了などにささえられて反発、とくに棒鋼、中形形鋼は昨年5～6月の高値をも越えるに至った。また石油もメーカーの市況対策奏効と出水率低下による電力関係需要の増加などから揮発油、重油を中心に反発した。5月後半来急落を続けてきた砂糖は7月にはいってからも軟化基調を改めなかったが、中旬にはいり主要製糖メーカーの本格的な市況対策実施を映じて急反騰をみるに至った。そのほかセメントもメーカーの市況対策の動きをはやして一部地区を中心に下げ止まり気配を示した。

この間非鉄は、国内需給が依然引き締まり状態にあるところへ、世界的な需給ひっ迫が当分続くとの見方が強まるに及んで一段と堅調となり、化学、紙なども上記品目を除けば引き続き堅調を示した。

最近の商品市況にみられる第1の特色は輸出の好調が関連商品の市況を下ささえ、さらにごく一部ではこれを押し上げている面も出てきていることである。たとえば条鋼類の輸出はこのところ米国、東南ア向けに急速に伸び、これが期近物の荷繰りを窮屈化させているが、とくに中型形鋼では輸出価格が国内価格を上回っているため、国内価格を引き上げる役割を果たしている。もっとも7月中には国内価格の急騰から輸出価格との差がなくなり上げ一服商状となった。第2の特色は、一部の商品では、市況対策がとも角もかなりの効果を上げていることである。たとえば人絹糸、石油、砂糖などでは、生産ないし出荷調整が需給を改善させ、それが市況底入れ感を惹起させる有力なささえとなっている。

第3はこうした反面、6月の小売商況の低調にみられるような末端消費の伸び悩みが、消費関連商品の市況軟化にある程度影響しているとみられることである。とくに夏物衣料品の売行き低調は、繊維市況の軟調にかなり影響しているものとみられる。また包装紙、板紙などについてもかねてから中元需要を見込んだ買い進みがみられたあとだけに、中元売出しの低調が市況の地合いを弱いものとした点は否定できない。

6月の本行卸売物価は前月比-0.2%と7か月間の続落となった。もっとも下旬には下げ渋りを示し、さらに7月上旬には前旬比+0.2%と若干ながら反騰を示した。これは非鉄、紙・パルプがじり高傾向を持続しているうえに、鉄鋼(条鋼類、くず鉄など)、石油・石炭製品(揮発油、重油など)、石油・石炭製品(揮発油、重油など)が値上がりを示したためである。なお、繊維も毛織物(冬物背広布地)の高値値決めなどを反映して上伸となった。

6月の本行小売物価(東京)は前月比-0.4%と前月に続いて軟化した。野菜など生鮮食品の下落が主因で、除く生鮮食品でみると+0.1%の続騰

となっている。そのほか、乗用車の値下げを映じ機械器具が低下、また燃料(灯油)が不需要期安

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

		対前年度比 上昇率		最近の推移			最近月の前年 同月比	
		37年度	38年度	38年				
		平均	平均	4月	5月	6月		
消費者物価 (東京)	総合 (季節商品を除く)	+6.6	+7.2	+1.6	+0.2	+0.1	+2.4	
		+5.9	+7.0	+1.3	+0.3	+0.2	+4.5	
	食料	+7.2	+7.9	+0.6	+0.6	+0.2	+0.2	
	家賃地代	+3.7	+10.6	+0.9	+0.1	+0.5	+10.7	
	公共料金	+6.7	+5.3	+2.6	保合	保合	+4.4	
	自由料金	+14.7	+18.2	+6.9	+0.2	+0.2	+10.9	
	その他商品	+2.9	+2.6	+0.4	-0.1	-0.1	+1.2	
	被服	+5.9	+5.6	+0.6	-0.5	+0.1	+1.3	
	光熱	+1.3	-0.1	-0.8	-0.2	-0.1	+0.3	
	住居雑費	+3.0	+4.5	+0.5	+0.2	+0.3	+4.8	
			+7.9	+8.4	+4.1	+0.3	-0.1	+6.1
本行小売物価	総平均 (生鮮食品を除く)	+3.1	+4.5	+0.6	-0.3	-0.4	+1.0	
		+2.7	+4.6	+0.4	保合	+0.1	+1.6	
	食料	+3.3	+6.3	+0.9	-0.5	-0.7	+2.5	
			+3.3	+4.3	+0.5	-0.2	+0.6	-1.9
本行輸出入物価	輸出	-1.9	+2.7	+0.1	+0.3	-0.1	+1.5	
	輸入	-3.1	+4.4	-0.5	-0.4	-0.1	+1.6	

卸売物価指数の推移

(単位・%)

	引締め解除後 37/11~ 38/11	引締め後 38/12~ 39/6	最近の推移							
			39年			6月			7月	
			4月	5月	6月	上旬	中旬	下旬	上旬	
総平均	+3.7	-1.4	-0.1	-0.3	-0.2	-0.1	-0.1	保合	+0.2	
食料	+9.2	-4.3	-0.7	-0.3	-0.8	-0.2	-0.4	-0.1	-0.3	
繊維	+11.1	-4.0	-0.4	-0.8	-0.7	-0.4	-0.2	-0.2	+0.5	
鉄鋼	+4.2	-1.3	-0.3	-0.2	+0.1	-0.1	+0.1	+0.2	+0.4	
非鉄	+1.1	+5.9	+1.1	+0.5	+0.3	+0.2	保合	保合	+0.2	
金属	+0.2	+2.0	+0.3	保合	+0.6	+0.6	保合	保合	保合	
機械	-1.4	-0.6	-0.3	-0.1	-0.2	-0.2	保合	保合	保合	
石油・石炭	+0.8	-0.8	+1.6	+0.1	-0.1	+0.1	保合	保合	+1.2	
木材	+3.6	-3.0	-0.8	-1.4	+0.6	+0.3	+0.7	-0.1	保合	
窯業	-0.2	-0.6	-0.5	-0.6	-0.3	-0.1	-0.1	保合	-0.2	
化学	-0.2	+1.5	+0.3	-0.1	+0.1	+0.1	保合	+0.1	-0.1	
紙・パルプ	+6.4	+3.2	+0.6	+0.4	+0.7	+0.1	保合	+0.1	+0.1	
雑品	同水準	-1.0	+0.1	-0.1	-0.3	-0.2	-0.2	+0.2	+0.1	
工業製品	+2.9	-1.1	保合	-0.2	-0.2	-0.1	-0.1	-0.1	+0.2	
非工業製品	+6.3	-2.3	-0.8	-0.7	+0.1	+0.1	+0.1	+0.2	保合	

となっているが、反面繊維品は若干の上昇となった。一方、消費者物価(東京)は前月比+0.1%と4か月間の続騰となった。小売物価とは逆に食料が若干の上昇となった(注)ほか、家賃地代も一貫して上昇を続けている。

(注) 同一商品が小売物価と消費者物価とで逆の動きを示すことがあるのは、①調査日・調査日数の相違、②ウエイトの相違、③報告者の相違などによる。

6月の本行輸出物価は前月比-0.1%と11か月ぶりに低下した。これは棒鋼、線材など鉄鋼条鋼類が米国向け輸出価格を中心にじり高を続けたものの、繊維(綿織物など)、食料(冷凍まぐろなど)、木材(ラワン合板など)が下落したためである。一方、輸入物価も前月比-0.1%の続落となった。粗糖が欧州、米国のビート糖増産予想から下落したほか原油、原料用炭がフレート安から軟化したため、くず鉄、非鉄地金などは欧米諸国における需給引き締め基調を映じて引き続き上昇傾向を変えていない。

#### ◇輸出好調から貿易収支の改善傾向続く

6月の為替収支は、経常収支が44百万ドルの赤字であったが、資本収支で97百万ドルの黒字をみたため、総合収支は7百万ドルの黒字となった。貿易収支をみると、輸入は依然高水準ながら着着きを示している。一方、輸出は前月に引き続き好調であったため、収支戻は9百万ドルの赤字にとどまり、収支改善が進捗した。今回の貿易収支の改善過程をやや長期的にみると、赤字幅(季節・不規則変動修正済み)は昨年10月に最大(79百万ドル)となった後、10~12月(月平均、以下同様)69百万ドル、39年1~3月53百万ドル、4~5月5百万ドルと着実に改善している。しかし、①貿易収支の改善は主として輸出の伸長によってもたらされたものであり、輸入は依然底堅い動きを示していること、②貿易外収支の赤字が月平均40百万ドル前後に上っていること、などはこの際注目しておかねばなるまい。一方資本収支は、産投マルク債、インパクト・ローン受入れにより長期資本の流入が大きかったため、短期資本収支が欧州市場の金利上昇を反映したユーロ・マネーの流出、

輸入の着着きに伴う輸入ユーザンスの増勢一服などから小幅黒字にとどまったにもかかわらず、97百万ドルの黒字となった。

#### 為 替 収 支

(単位・百万ドル)

	38年	39年	4~6月	39年		
	10~12月	1~3月		4月	5月	6月
輸 出	516 (448)	450 (380)	512 (429)	476 (398)	511 (446)	548 (442)
輸 入	529 (371)	543 (404)	549 (450)	526 (438)	564 (467)	557 (444)
貿易戻	△13 (77)	△93 (△25)	△37 (△21)	△50 (△40)	△53 (△21)	△9 (△2)
貿易外戻	△38 (△21)	△36 (△21)	△31 (△30)	△26 (△29)	△49 (△31)	△35 (△32)
経常戻	△51 (56)	△129 (△46)	△74 (△51)	△76 (△69)	△102 (△52)	△44 (△34)
長 資	34 (23)	23 (22)	42 (59)	35 (19)	21 (94)	70 (63)
短 資	21 (△26)	99 (28)	92 (42)	74 (66)	26 (△31)	27 (△27)
資本戻	55 (△3)	122 (50)	84 (61)	109 (85)	47 (63)	97 (36)
誤 差	△14 (△13)	△14 (3)	△30 (3)	△54 (△1)	10 (5)	△46 (6)
総合戻	△9 (40)	△21 (7)	△20 (13)	△21 (15)	△45 (16)	7 (8)

(注) カッコ内は前年同期(月)類、各期月平均。

6月の輸出は、前年同月比で為替+24%、通関+26%と引き続き好調であった。季節性を除去して4~6月の水準を1~3月のそれに比較しても、為替+7%、通関+12%と根強い増加基調にあることがうかがわれる。商品別の動きを通関統計でみると、機械類が船舶を中心に続伸し、鉄鋼も5月来の好調を持続しているほか、合織、雑品類も引き続き好伸している。先行指標でも、このような傾向は当分持続しうる見込みである。すなわち、輸出信用状は前年同月比+35%、輸出認証は同+34%と、前年同月の水準がたまたま低かった点を割引いて考えても、機械類、鉄鋼などを中心に著しい伸びを示している。このような輸出好調の背景にはもとより過去の合理化投資に基づく輸出力強化があることは否定されないが、米国の好況持続や欧州諸国のインフレに基づく海外需要の活況による面も少なく、また最近一段と好調を示しているのは、金融引締めによる内需の伸

び悩みや操業度維持のための輸出意欲の高まりによるところがかなり大きいと思われる。

### 輸 出 認 証 の 内 訳

(単位・百万ドル)

	38年	39年	39年	39年	39年	39年
	10~ 12月	1~3月				
織 維	123 (+4)	107 (+14)	121 (+21)	112 (+19)	124 (+12)	127 (+33)
化 学 品	27 (+43)	28 (+14)	35 (+19)	33 (+10)	36 (+22)	35 (+25)
金 属	89 (+19)	81 (+2)	104 (+27)	99 (+28)	107 (+25)	104 (+30)
機 械	170 (+43)	156 (+39)	166 (+42)	176 (+60)	133 (+15)	190 (+52)
雑 品	33 (-6)	31 (-5)	39 (+4)	35 (+1)	38 (-4)	43 (+15)
合 計	540 (+18)	493 (+19)	552 (+25)	544 (+27)	526 (+14)	587 (+34)
米 国	142 (+12)	135 (+15)	162 (+21)	155 (+24)	164 (+14)	168 (+25)
ア ジ ア	132 (+24)	113 (+10)	123 (+17)	126 (+23)	121 (+7)	122 (+22)
欧 州	62 (+3)	69 (+35)	79 (+20)	87 (+57)	57 (+8)	67 (+20)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%), 各期月平均。  
アジアは、インド、タイ、フィリピン、シンガポール、インドネシア、台湾、韓国、香港、琉球。  
欧州は、英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

6月の輸入は、為替、通関とも前年同月比各々+25%、+24%と依然高水準であるが、このところやや落ち着いた動きをみせている。ちなみに、季節性を除去した計数によると、4~6月の水準は1~3月に比べ為替で-4%、通関で-1%と、いくぶん低下したことになる。商品別の動きを通関で見ると、機械類を除いては、原材料をはじめとして軒並み落ち着いており、前月まで増勢を持続していた食料もここへきてようやく増勢が鈍化した。もともと、先行指標で見ると、輸入はすでに下げ止まりの傾向を呈しており、この点生産の根強い動きともあわせ注目の要があろう。すなわち、輸入信用状は信用状付きの輸入の比重が前年より大幅に低下しているにもかかわらず、前

年同月比+5%(4月-3%、5月-9%)とやや増勢に転ずる気配があり、輸入承認も前月に引き続いて水準が上昇している。これは、一部商社筋に先行き模様眺めや輸入担保率引下げ期待ないし金繰り繁忙化などから、輸入手控えないし引延しの動きがみられてきたのが、延し切れなくなったことや、鉄鋼・非鉄などでは、輸入原材料在庫率がきわめて低く、高水準の在庫手当てが続いていることなどによるものとみられる。なお、とくに鉄鋼については業界の生産態度積極化ともからんで、再び買付け増加の気配がみうけられる。

### 輸 入 承 認 の 内 訳

(単位・百万ドル)

	38年	39年	39年	39年	39年	39年
	10~ 12月	1~3月				
食 料	146 (+98)	108 (+46)	95	90	101	94
原 材 料	391 (+46)	298 (+9)	279	222	302	312
原 綿	48 (+28)	37 (-17)	28	22	31	32
原 毛	44 (+80)	33 (+4)	26	22	29	29
鉄 鉱 石	32 (+60)	21 (+11)	26	18	33	28
く ず 鉄	27 (+237)	15 (+37)	15	10	17	18
石 炭	13 (+19)	11 (+5)	12	12	9	15
石 油	71 (+16)	69 (+20)	59	49	60	67
木 材	29 (+21)	27 (+5)	25	17	28	31
鉄 鋼	14 (+239)	12 (+125)	12	9	11	16
機 械	62 (+2)	68 (-5)	68	44	89	70
そ の 他	88 (+87)	76 (+49)	75	67	79	79
合 計	702 (+55)	562 (+18)	529	432	583	571

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%), 各期月平均。  
4月以降の計数は計上方式変更のためそれ以前と連続しない。